F1-死への疾走 下

ボブ・ジャッド

翔田朱美＝訳

講談社

|訳者|翔田朱美　1948年生まれ。早稲田大学文学部卒業。訳書に『逃げる女』(二見書房)『マザー・テレサ』(佑学社) ほかがある。

F1—死(し)への疾走(しっそう)(下)

B.ジャッド | 翔田朱美(しょうだあけみ) 訳
© Akemi Shoda 1990

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1990年11月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-01
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版———豊国印刷株式会社
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。　(庫)

ISBN4-06-184744-9

江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社文庫

F1—死への疾走

(下)

B.ジャッド|翔田朱美 訳

講談社

FORMULA ONE

by

Bob Judd

Copyright © 1989

by

Bob Judd

Japanese language paperback rights

arranged with

Bob Judd,

c/o Ed Victor Ltd., London

through

Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

目次

F1—死への疾走(下)
訳者あとがき

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

F1―死への疾走(下)

●主な登場人物

フォレスト・エバーズ　主人公、ぼく

ミシェル・ファブロ　アランデル・チームのレーサー

ケン・アランデル　アランデル・チームのオーナー

ニコル　ミシェルの恋人

スーザン　フォレストの妻

ヴェロニカ　フォレストの愛人

マックス・エリス　アランデル・チームの主任設計者

アリシア　ケンの前妻

ジャニス・ヘンリオン　BBC放送のニュース・キャスター

アリステア・コールマン　アランデルチームのスポンサー

マイルズ・コートランド　コートランド・ミルス社のオーナー

アーサー・ウォーレン　映画スター

ビバリー・ワイエス　アーサーの恋人。UCLAの大学院生

15

レースが始まる直前、押し寄せた観衆の顔また顔をじっくりながめやる時間がある。デイヴ、ビル、ナイジェル、チャールスがカウルをもう五〇回も磨き、あらゆる締め具、回路、プレッシャー、温度を念には念をいれて再三チェックし、再チェックしているあいだ、ぼくはピットのなかで所在なげに、われわれレース関係者と十万の観衆とを隔てる細いロープの警戒線ぎりぎりまで押し寄せている顔また顔の波をじっと観察する。そうやって、いやがうえにも湧きあがってくる興奮から自分を遠ざけ、気持が乱されるのをしずめているのだ。裁判官のように冷静になり、距離をおくための手段だった。

若手のドライバーにはレースの前というとその興奮に飲まれて浮かれ騒ぐのもいる。そうやって神経をたかぶらせ、士気を盛りあげようというのだ。だが決勝当日になって、信号が赤から青に変わる直前に、興奮は限界にまでのぼりつめ、反対にパニックに陥ってしまう。

ぼくは年のいったメキシコ人のレース・マーシャルの顔や、フラッグをふったり立ち往生して

しまったマシンをコースからどかしたりしている白いオーバーオールを着た男たちを見つめていた。彼らもダークブルーのアランデルのドライビング・スーツを着て作業台によりかかっているぼくや、マシンや、立ち働くメカニック、スペア・エンジンとタイヤ、それに道具類を見るともなしに見ている。前にもうひととおり見ているから、いまさら特別の関心があるというわけではないよ、といいたげな視線だ。

何世紀も昔、この民族はあの同じ無関心な表情を浮かべて、町でいちばん美しい少女をつかまえて薬で眠らせ、アステカの神殿に運んで腹わたをえぐり出し、体をばらばらにして神への生け贄としたのだろう、とぼくは思った。

目の前にビヴァリーの顔が浮かんでくる。昨夜の出来事が悪い夢であってほしい、ビヴァリーの顔が観衆のなかに見えて、にっこりぼくに微笑みかけてくれたらどんなにいいかと願わずにはいられなかった。だがふと現実にもどってみると、そんなことは起こるはずもない。怒りがむらむらとわき起こり、蒸気のように体から噴きだしてきそうだった。

ぶくぶく太って、いかにも甘やかされているような少年にぼくの視線が落ちた。きっと駐車場にはフェラーリでもおいてあるのだ。フェラーリのロゴのはいったデザイナー物のTシャツのうえに、セーム皮のジャケットをはおっている。鼻はちんまりして、両頬にはぽっちゃり肉がついていた。チャンスさえあれば、おれだってこういうマシンを走らせることぐらいできるんだ、と生意気にも考えているのだ。レース・マシンだって自分のフェラーリとたいして違いやしない、

少しばかり性能がいいってくらいだろ、と。せいぜい十八歳のガキだ、何ごとも自分の思いどおりにならなければかんしゃくを破裂させる手合いだ。

その少年はニコンの自動カメラでスナップを撮りだした。ガールフレンドはなにかおもしろいことはないかと、アランデルのガレージをきょろきょろしていたが、なにも見つからないと、いかにも退屈そうにポケッとした顔をしていた。彼はぼくを撮ろうとしてレンズをこちらに向けた。その瞬間、彼の背後でキラリと光るものがぼくの目にはいった。少年の四列か五列うしろで、手をかざして陽ざしをよけている男がひとりいる。陽ざしで顔が赤らみ、敬礼がそのまま凍ってしまったような目にかざした手に、立て爪にダイヤがはまった大きな金の指輪をしていた。

水のなかにすべり込んでいくワニよろしく、ぼくはできるだけ自然に見えるようにゆっくりと作業台を離れ、少年のほうに歩いていった。危害を加えるような男じゃないよと言わんばかりのクロコダイル・スマイルを浮かべ、さも感心したように彼のカメラを手にとった。いかにもその作りが気に入ったふうを装って。大物（ビッグ・タイム）レーシング・ドライバーが自分の持物を感心したようにながめているので、少年は少なからず得意げだった。

「一枚撮ってあげようか？」ぼくは訊いた。鷹揚にゆったりとかまえていたが、内心ではあせり狂っていた。

ガールフレンドも興味をとりもどしてパッと顔を輝かせた。写真を撮られるのが好きなのだ。グランプリレースの日の記念すべきステキな一枚になるよう、もっとより添ってと合図した。彼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

らの後ろにいるピンク顔の男もはいるようにカメラを向けた瞬間、男がこっちを見た。すかさず、ぼくはシャッターを切った。男はひょいと頭をかくし、群衆のなかにまぎれこんだ。

「デイヴ」そう叫んで彼にカメラを投げた。「こいつを預かっといてくれ」急いで群衆のなかに跳びこんでダイヤの指輪の男のあとを追った。

するとぼくの腕に四方八方から手がのび、だれかの腕がぼくの肩を抱き、ぼくをよく見ようと大勢の人がゆくてに立ちふさがった。群らがる観衆の波のまっただなかで、ぼくは注目の的だった。だれも道をあけてはくれない。みんなぼくに声をかけたがった。レースはどうなります、トランスミションのぐあいは、サインをください、と。ホルターネックのトップをつけたティーンエイジャーが汗だらけのぼくの首にブチュッとキスをした。ドライビング・スーツからコールマンのバッジをもぎとろうと手がのびてくる。

一分四十五秒のあいだ観衆にもみくちゃにされ、前に進んだのはほんの一メートルほど。すでに男の姿はなく、追いかけるのはもう無理だった。

ぼくはにっこり微笑み、うなずき、回れ右をして、ありがとう、ちょっとごめん、パルドナーメ、グラシアスとくり返しながら、警戒線のこちら側のアランデル・ピットの安全圏までやっとのことでもどってきた。ドライビング・スーツをつかむ手や指をもぎとりながら戻るのはひと苦労だった。

ピットにもどってみると、さっきの少年が警戒線にのしかかりカメラを返せと大声で叫んでい

た。デイヴは知らん顔をしている。
ぼくはカメラをとってフィルムを巻きもどし、裏ぶたをあけ、なかからフィルムを手のひらに落としてカメラを少年に返した。相手は当然フィルムも返してもらえるものと思っている。ぼくはフィルムをデイヴに投げてやり、安全なところにしまっておいてくれと言った。
「おまえのタマだと思ってしっかりガードしてな」デイヴはぎょっとしたようなふりをしてわざと自分の股間をしっかりおさえた。ぼくは少年にふり向いた。
「いまのフィルム、いくらで売ってくれる？」
顔をしかめて考えている。赤んぼうが「これなーに？」と叫びだす瞬間によくやるように、太いまっ黒な眉をよせた。
「このフィルム、いくらで売る？」
「父さんと母さんの写真も写ってるんだ」
「ブエノ。いい子だから、パパとママの写真をたっぷり撮ってやれよ。いくらだ？」
「それにぼくの車と家も写ってるから」
「いいか、おい。人をなめるんじゃないぞ、おまえのジャケットを首にまきつけて、目が跳びだすまで腕をねじあげてやろうか」
少年はぼくの言っていることがわかったようで、マックスが出した五万ペソをとっていった。
ラウドスピーカーがウォームアップ・ラップが始まるので、ドライバーはピットレーンに並ぶ

よう放送している。ぼくの頭の中には何百という疑問が渦まいていたし、ビヴァリーが死んだこともまだ信じられなかった。しかし、考えているひまはない。ぼくは耳栓をした。

暑くて、むんむんしていた。観客たちと押しあいへし合いをやったのでぐっしょり汗をかいている。だから耐火マスクをかぶったとき、マスクがすでに濡れていたので内心むっとした。だれかがミネラル・ウォーターをこぼしたにちがいない。空になった瓶が作業台のうえにころがっていた。ドライビング・スーツのジッパーをあげ、ヘルメットをかぶり、重たい耐火手袋をつける。五ポンドのヘルメットのしたに、二重になったウールの防火フローレル・マスクをつけ、ぼくのしたくができた。いよいよ摂氏三五度の炎天下、日曜のドライブに出発だ。

万歳をするように両手を上にあげて体をマシンのなかにすべらせる。ケンがぼくのわきにかがみこみ、ナイジェルが安全ベルトを締めてくれる。体がすっぽりとマシンに縛りつけられるまで肩と腰の部分で締めつける。ケンが酸素マスクと無線をヘルメットに接続する。彼はなにか言いかけて、途中でやめた。いまさら言うことなど何もない。マシンの後ろのほうで金属ががちゃがちゃいう音がした。デイヴ・スペンスがスターター・エンジンのソケットをトランスミションの後ろのドライブナットに押しこんだのだ。スターター・エンジンのするどい叫びがあがってエンジンが息を吹きかえし、ぼくはスロットルをぶちこんでころがりだした。

陽ざしと暑気とほこりと騒音が一緒になって前方が陽炎のように揺れている。ピット・レーンを加速して進みメイン・ストレートに出た。ファンたちはごひいきのチームの旗をふり、すでに

レースがスタートしたかのようにぎやかな声援をおくっている。コースの両側のグランドスタンドに総立ちとなり、フェンスとパトロールする警官の向うに人々の顔また顔が列をなして揺れていた。

メキシコ人のドライバーが出場していないのはさぞかし残念だろうとぼくは思ったが、彼らは一向に気にしていないようだ。

ぼくたちは大体スタートの位置順にならんで、つんざくように怒号するノイズをあげ、カラフルなF1マシンの長い縦列をつくってコースを練り歩いた。最前列はマルセル・アラル、彼がポールをとった。彼のマクラーレンはぼくのマシンとくらべて、少なくとも七五馬力はパワーが強い。ということはより強力なダウンフォースが得られるようウィングをセッティングできるのだ。したがってストレートでもコーナーでも速い。途中でリタイアなんてことにならなければ、勝利の女神はアラルに微笑むだろう。

アステカ族最後の皇帝モンテズマの名をとったモンテズマ下痢の逆襲をうけ、アラルはレースのあいだ少なくとも五、六回はあわただしくピット・インするだろうと噂がたっていた。マルセルがマシンをとびだし、ジッパーをさげてトイレに駆け込む姿を想像しただけでおかしいじゃないか。彼はこの数日腹の調子が悪かったそうだが、それでもちゃんとプラクティスで最速ラップを出しているのだ。マルセル優勝の公算は大きい。このメキシコ・グランプリで勝てば、世界チャンピオンは決まったも同然だ。そもそもピット・インの噂をたてたのも本人なんじゃないかと

ぼくは疑っていた。あのフランスの小男一流のユーモアなのだ。

ロータスに乗ったフェンザはアラルのマクラーレンの横からのスタート。ここは実際にはポール・ポジションよりいい位置なのだ。やわらかなレーシング・タイヤからすり切れるゴムかす、土やほこり、紙など、インサイド・コースはけっこう後塵まみれになる。そこへいくとアウトサイドの列はレーシング・ラインに沿っているので、マシンは跳んでくるゴミのなかを走らなくてもすむ。ぼくのスタート・グリッドは二列後ろのインサイドから、前にウィリアムスのシフレ、その横がもう一台のロータス、マイケル・バレットで彼はちょうどフェンザの後ろになる。

つまり、スターティング・グリッドはつぎのページのとおりだ。

マックスのオートマティックならフェンザをのぞいて、あとは全部スタートで抜きさることも不可能ではない。

スタートとともに瞬時にしてF1マシンを調子にのせ、きれいにスタートを切るのは至難の技だ。ちょうど嵐のさなか、ヨットのデッキのうえでダンスをするようなもので、習練がいる。クラッチがあってもなくても、とにかく中途半端ではだめだ。パワーは六〇〇〇から九〇〇〇回転であがってくる。それ以下だとエンジンがもたつくか、マシンがすっきり走りだす前によろけてしまう。しかし、いったん好スタートが切れれば、クラッチがあってもなくても、できるだけ徐々に後輪の馬力をゼロから七〇〇まであげていけばいい。パワーを出しすぎると、ホイールがスピンし、まわりでほかのマシンが走りだしたというのに、煙をあげてグルグル回ってしまう。

ルチアン・フェンザ
(ロータス)

マルセル・アラル
(マクラーレン)

マイケル・バレット
(ロータス)

ウィルソン・シフレ
(ウィリアムス)

マウリーツィオ・プライアーノ
(ダニエリ)

フォレスト・エヴァーズ
(アランデル)

イアン・ノークロス
(マクラーレン)

アルバート・プルグノ
(フェラーリ)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com